

くすかじ まゆみ
屑籠の檀

馬場駿

胸が詰まるような感覚がして呼吸も少し粗くなったのでバルコニーに連絡するサッシ戸を開け放った。やや温暖なこの地でも木々が色づく晩秋、この時季特有の頬を軽く刺すような爽やかな風が、強張った顔を撫せて後ろのドアに向かって走っていった。換気をするために入口を少し開けておいたのだ。

引越荷物が着いたり、新しい家具が業者によつて搬入されたりする日に、結婚披露宴の段取りで東京に出掛けて家に居ないので、真弓に私が帰るまで詰めていてくれと頼んだのに姿が見えないのだ。彼女の荷物さえ無かった。用事で外に出たという感じでもない。急に襲つてきた小さな震えは何なのか、真弓に向けた怒りが原因だとは思いたくない、いや正直に自分に問い質せば完全な否定はできないが、むしろ彼女への配慮不足、自分の不手際であり、このところの自分の言動が理解不能になっていることに苛立ち、生まれてこの方四十年もかけ

て積み上げてきたものは一体何なのかという自虐的な想いの方が強い。一回りも年下の女の所為にするのは恥ずべきことのように思えた。

心なしか咽(むせ)かえるようだった室内の空気が外気と入れ替わったころ、足元の乱れた寝具に改めて目をやった。シーツすら施していない敷布団のほどに血痕があり、その近くに精液と思われる複数のシミが点在している。こんなものを始末もせず真弓は出ていったのか。その程度の女だったのか。いや、想像できるシーンはレイプだろう、しかしそうなら敷布団は可笑しい、そう思ったとき俄かに蘇った若い男子アルバイト学生の台詞。

「財田さん、あの女と本気で結婚する気ですか、あいつ男から逃げてこんな山奥まで来たって話ですよ、それだね、ここでもさつそく男と寝たってこと、嘘じゃないですよ、その男って俺だから」あのときは単なる嫌がらせと決めつけて一笑に付したが、どうやらそうでもないらしい。見たくも無いと布団を二つに畳んだとき、友人の医師柏木からスマホに連絡が入った。

「財田、喜べ、田崎教授がお前を引き取ってくれてさ。しばらくは客員扱いだが我慢しろ。それから挙式と

披露宴な、元の病院仲間も誘つての会員制にした。離婚の前科あるし大げさにしたくないんだろ？ 会場のホテルも予約したから。詳しくはまた連絡する」

「再就職の件、感謝する、持つべきものは友だな、ありがとう。結婚の件はまた駄目かもしれない、悪いな、こっち方面の俺はまず落第だよな、すまない」

「オイオイ参つたな、でもまあ、頼まれもせず勝手に動いた結果だから、何とか収めるよ、それにしてもお前女運悪いよなあ、初恋に破れ、初婚相手には不倫され、ナスが原因なのに医療過誤の冤罪で良縁と評判だったお嬢さんからは一方的に婚約破棄されたって、まるで悪質なコミックだな、まったたく。財田、いつそのこと俺の妹亜沙美でどうだ？ もうすぐ三十五だけ成ればあいつは初婚だぞ」

「まだ独りか亜沙美さん、理想高いんだろ」

「言うかそれを。お前こそ女を難しく考えすぎなんだよ、じゃあな。何か出来ることあったら電話しろ」

柏木の声は最後まで明るかったが、その分深く落ち込んだ。彼の言う通りだ。医師免許を取得したとたん初恋の女は、「今までは経済的なことも含めてあなたを支援

できたから対等で居られた。でももう終わり。もうあなたにしてあげられることが何も無くなった」と言つて去り、その後見合いをして結婚した女は、「あなたは仕事に忙殺されて家庭を二の次にしたわ。こんな暮しじゃ結婚してないのと同じじゃない」と責め、不倫に走つたのはその所為だと言つて譲らなかつた。世間でいう良縁の相手はマスコミという名の世間の批判の方を信じて、

「わたしは准教授の医師と婚約したの。将来のないあなたには興味ありません」と破棄に向かつて一気に走つた。それぞれの女の理屈と行動は今以つて納得がいかない。一つ深呼吸をしたあとで、スマホを手にしたついでに家主に電話をした。出たのは奥さんの方で財田と名乗つた瞬間に勢いよく喋りだした。彼女によれば、真弓は昨日の午後訪ねて来た。身なりを整え、大きなバッグを二つ沓脱石の上に並べて辞去の挨拶をした、その最中に兄だという男が荷物二つを車のトランクに運んだという。「財田とは結婚そのものが無いことになりましたので」家主に告げたという辞去の台詞が私への伝言なのだろう。置き手紙すらないのだから。

「余計なことかもしれませんが、わたしには兄妹には見

えませんでしたけど」

家主からの長い報告を受けた後で、真弓の言葉通りだとして応えたが、とりあえず契約解除はしないでおうと決めた。「結婚そのものが無いことに」真弓が使ったこの言葉の含意が読みきれないのと、生家で母親と一緒に住めばまた、新たな縁談の押し売りが始まるからだ。彼女の疑惑はともかくとして、三面記事的にみれば真弓をさらった男が優しい肉親で、戸籍上も夫になっている自分が結婚目的の誘拐犯のような形になっている。家主が警察を呼ばなかっただけでも感謝すべきかもしれない。何にせよ実に滑稽な結末だ。

電話を切った後で肩を波打たせて自嘲した。息を吐き出すような笑いではなく、「ひっひっ」と息を引き込むような苦しい笑いだった。

バルコニーに出て近隣の甍を眺めながら煙草を吸い、医師としての自分に戻って真弓のことを振り返ってみた。真弓を連れ自分の生家に行って母に結婚する旨伝えているが、そのとき母が、医者の子の伝統を守り家長制時代に創られた家訓を可能な限り順守して陰ながら夫を支える妻の役目について滔々と語ったことが氣に

なった。後日母は秋野真弓の名と実家の住所のみを興信所に渡して身元調査をしていてその結果を伝えてきた。報告書を見ても母が強く結婚に反対し続けたのはまずまずの結果だったのだろう。傷心した息子が気分転換で行ったバイト先のホテルで素性の知れない女を拾ってきた。その程度の認識だったと分かる顛末だ。私自身も少しく驚きはした、ほとんど身の上話をしない女だったのだから当然なのだが。調査書はかなり詳細だったのだ。バイト中に特に不思議に思っていたことが解決されたということもある。両親が父親は国語、母親が歴史と科目こそ違うが公立高校の教諭で、兄も国立大卒の公務員であること。彼女が高校では弓道部所属であり、都内の有名女子大文学部を卒業後二年ほど地元の仕事所で働いて退職し、その後生家を出て四年、あちこちを転々としていたこと。しかも自閉症に陥ったことがあり、親の方針、指導に従わないので父親には昔でいう勘当を言い渡されていることなどがそれである。意外なことに調査員は実兄の秋野雅人にも会っていた。それにしても市役所勤務の際に何があったのだろう。別に今更分かつても仕方がないが、興味が出てきたとは言える。興

味と言えば、二月にバイト先で初めて彼女の働く姿を見たときに感じたものもしつかりした体幹による姿勢の良さや上下肢の美しさであつて、言わば運動部のトレーナーのような視点だつた。セクシャルなものとはほとんど無縁の興味だつたように思う。産婦人科医として妊婦や産後間もない女性の体形ばかりを見つけていた関係だろうか。自分は大食堂、真弓はVIP担当補助と主な持ち場が違つたのでめつたに同じ作業にはならなかつたのだが、遠くから見ても背後から見てもまず珍しい完璧に近い動作姿勢だつた。付き合つてからもどこか悲哀の色を感じさせる表情を見せ、寡黙さも際立つていた。自分の名前を解説したときだけはなぜか明るく、父親が名付けてくれたと言つて笑顔さえ見せた。勘当はされたものの本当は愛されたかつたのだろう。彼女によると、本来のまゆみは花壇の壇の土偏を木偏と取り替えた漢字の「檀」と書くのだそつで、人名用漢字にはあるものの女の子に使うのは硬いので真弓として届け出たという。植物の方の檀はしなやかで強く、香りもいいらしい。昔は弓の材料として珍重されたらしい。部活の弓道もそれゆえの選択かもしれない。これらは興信所の調査結果を

知ると全て納得がいく。

室内に戻ると家主に再び電話をかけた。「すみません財田です、教えてください、駅前からここまでの間に花屋はありますか」

急に知りたい衝動にかられたのだ。答えは「駅に向かう大通りにありますよ」だつた。ダイニングキッチン隣の隅にある屑入れに丸めて押し込まれ一部食み出していた枝は初めて見るが檀(まゆみ)だと直感していた。クズの真弓は屑籠にとの自虐メッセージなのか、それとも屑籠に入り切れなかつた真弓の部分も解かつてくださいという懇願なのか。キッチンのシンクに水を溜めて一緒に生けるつもりだつたのだろう竜胆(りんどう)と小菊の切り花を浸けて出ていつた真弓の真意を探ろうとしている自分がいた。足蹴にされたも同然なのに、どこかでまだ真弓を理解しようとしている自分がいた。

そんな自分を揶揄するかのように、入室時には気づかなかつたが、備え付けの二つ口ガスレンジのコックに部屋の鍵がぶら下がつていた。

「底抜けのお人好しかもしれないな、俺は」
独りつぶやいてサッシ戸を閉め、出入り口の踏み込み

に立つた。

「さてどこに行くかな」口にしてから、とりあえず歩こうと外に出た。

想いは初めて言葉を交わした時にさかのぼる。

「いつも独りで黙って食べてるんだね」

従業員がほとんど食べ終わつた後の従食で以前から気になつて来た二十代と思しき女子バイトに声を掛けた。「いつも」を付ければずっと注目していたことが相手にも分かる。しかし振り向いただけで彼女の返事はなかった。警戒されたと思つて横で黙つて食事が続けていると、彼女の口から突然予想外の言葉が飛び出した。

「わたし昔、アスペルガーシンドロームつて診断されたの、関わらない方がいいと思う。対人関係うまくできないから」

彼女は私が医師であることを知らない。難しそうな病名を言えばそれが何かを知らない男は面倒を避けてナンパから撤退する。知っていればなおさら逃げてくれる。それが彼女の経歴則なのに違いない。症候群は嘘だと思つた。もし本当なら総務的に見てVIP主任の補助役に

抜擢するはずが無いからだ。率直にそう言つてみた。相手が応えなければならぬ会話法で引き摺つて行くひとときにしたいと。言い換えれば時間つぶしだ。

「誰でも良かったみたい。臨機応変に動く役は主任が全部やつていて、私は顧客の会食の用意とお開き後の始末がメイン、決められたことを毎回きちんとこなすことだけがお仕事だったから」

「いや、もう一つ君には重要な役割が与えられていたと思つよ。上品な接待役には不可欠な綺麗な姿勢と所作だ。もちろん君自身は無意識だろうけど、それならなおさら稀有な存在だ、選んだ主任の眼も優れてる」

彼女は少し驚いたような顔をしたが、頬が次第に緩み終には笑い出した。

「おじさん誰なの？ ううん、何する人？ 最初大食堂で見かけたときからずっと、何て言うのかな、仕事を干されて都落ちした情けない感じの中年？ あ、ごめんなさい、でもそんな感じだったから」

「鋭いね、まあ、そんなもんだ、外れちゃいない」

「嘘だあ、いま分かつた、きつと世を忍ぶ飯の姿だ」
そう言う箸で自分の大皿からエビフライを摘まん

で寄越した。「食べて、料理長がくれたの。わたし、ここ山の中から沢蟹の素揚げの方が好きだし」

「ありがとう。どうやら君は大モテらしい。男性に言い寄られて大変だろう、星の数ほどいるのかな？」

わざと地雷を踏んでみた。

「もう終わったからわたしはこれで」と彼女は立ち上るとと食器を載せたトレーを洗い場に運びもせず食卓出口まで真つ直ぐに歩いて消えた。

私はその後姿を見続けた。臀部の動き如何に関わらず頸椎(けいつい)から尾椎(びつい)までの脊柱が一直線で揺るぎ無い。改めて「きれいだ」とため息をついた。同時に二人分のトレーを運ぶ腰折れした自分の姿を思い、参ったなと思いつつ会話の成果たるエビフライを口に運んだ。

「フラワートリップ希美」という店の名前に魅かれ、普段なら気恥ずかしくて入りづらい花屋に迷わず飛び込んだ。奥に女性が一人居た。

「のぞみさん、ですか？」会ったこともない相手と待ち合わせでもしたかのような訊き方になった。

「はい。お花選びですか？」

「檀と竜胆と小菊を使って花を生けてもらうなんてこと、可能ですか？ 引越して来たばかりなので、部屋が片付いてからで良いんですけど」

「お宅に出張してということですね、できますよ。花器はどんなものをお持ちですか？ それとおっしゃった花以外のものは使うということでしょうか」

「花瓶の類は持っていないんです、それも選んでください。さっきの三種類の花さえあれば他に何を使うかはあなたにお任せします」

ハッと気づいた、真弓は花瓶が無くて生けるのを諦めただけかも知れないと。生けると生きるはどこかでつながるのではないか。そうなら生きる真弓にとっての花瓶とは何だったのだろう。

「作品を置く場所はどこでしょう」

「玄関の下駄箱の上」部屋に床の間は無い。

「お宅はマンションタイプ？」

「ええ、戸建てじゃありません」

小洒落たエプロンをした若い女店主と問答をしながら自分が何をしようとしているのかを自問しだした。答

えは？ 無かった。今の自分が不明なのだ。

花屋の次に入ったのが喫茶点だ。席についてブルーマウンテンを頼んでから柏木に連絡を入れた。

「どうした財田、女が戻ったのか」嫌な奴だ、半分笑いながら言っている感じがする。それだけ遠慮が要らない仲ではあるのだが、今の自分には少しきつい。

「せっかく所帯道具を新調したんだからとりあえず独身で住むことにした。家具なんかを動かす手伝いを頼めないか。別にお前本人じゃなくてもいいからさ」

「ほう…分かった。じゃ明日二人ほど送る。俺も場所を憶えたいから顔だけは出す」

相手が仕事なので、すぐに話を終わらせた。とにかく何かを始めたかった。これで日々の暮らしと新しい仕事だけはスタートする目途がついた。ただ、田崎教授が勤務先としての附属病院を指定してくるのかはまだ分からない。通勤可能な処以外ならまた引越しになる。

「お待たせしました、ブルマン百パーセントではありませんが、専門店ではありませんので」勘弁ください」

女店主のお辞儀には誠実さがあつた。それに全てがブルー、憂鬱ではないですよとの励ましとも受け取れる。

私は嬉しそうに頬を緩めて「ありがとう」と言った。

「ありがとうございます」と真弓が医院の外に出たときに深々と頭を下げてお礼を言った。左目の眼帯が何ともいたましかつた。顔を上げたとき、眼帯をしていない右目から涙が流れ出していた。初めて真弓を綺麗だと思った。

スキーシーズン到来が近くすべての部署の働き手はその準備にかかる共同作業をしているときに、彼女は左目に何かゴミを入れてしまった。患部が痛くて片目で作業を続けている彼女にきつく当たっている作業主任をどけて、専門ではないにしろ医師なのだからと診てみた結果、眼科医院に連れて行く必要があるとして動いたのだが、上司たちはただのゴミだ、大袈褌だとして医者行きも社用車の使用も認めなかった。私は彼らが制止するのを無視して営業用のセダンの中に彼女を押し込んで長野方面に向かい志賀高原を下った。田舎のことで眼科はなかなか見つからなかった。途中で五回ほど地元の人から情報を訊いている。結局数十キロも走ってやっと診察を受けることができた。眼科医によればゴミには違いないが細かくても鉄、角膜の創を放置すればかなり深刻

なごになつていたといふ。

この事件で会社側は私を危険人物として警戒し、スキ
ーができるからとバイト先を選んだのにシーズン前に
解雇される羽目に陥つた。就業規則違反というもつとも
らしい理由付けが笑えるが、争うのも馬鹿馬鹿しくて職
場に未練はなかつた。一方、従業員たちの間では二人が
既に出来ているとして噂は真実の域にまで達していた。
そうでなければ他人のためにクビ覚悟で尽くす奴など
いないというわけだろう。

真弓の眼の治療のためにあと一、二回は医院に行く必
要があり、必然的に一緒に志賀高原を下る流れになった。
経理に既往の賃金を求めたが、給料日まで払えないと
言つて譲らない。「俺の賃金は捨てるから彼女の分は即
刻払え。社長もそれなら許可する」と断言をした。

現金なものでその通り会社の許可は下りた。
バイト先のホテルを去つた日の夜は眼科医院に近い
須坂の宿に泊まつた。

眼のこともあり今日は入浴しないという真弓を残し
て温泉に浸かつたあと、部屋に帰ると夕食の料理が並ん
でいた。仲居は氣を利かしてか、あとは宜しくとすぐに

出ていったといふ。まるで数十年連れ添つた夫婦のよう
に言葉を発せず食事を続けていたが、沈黙に心疲れた
らしく真弓が小さく笑つた。

「何かこうしてゐるのつて不思議」

「ああ、人生何があるか分からない。捉えた偶然をとり
あえず善として楽しめばいい」

「お坊さんみたい、いくつですか？ お歳」

「惑いつ放しただけ歳は不惑ちようだよ、君は？」

「もうすぐ二十九、掛け値なしのおばさんです」

「これからどうする方針なの、希望と言つてもいい」

「わつ、突然人生語るんですか、困つたな」

「無理強いはいしない、人それぞれだしね。でもちよつと
興味あるんだ」

「自分に無理強いしないと言えない希望 かな？」

真弓は柔らかな笑みを湛えてお銚子を手にした。一本
付きプランだったので日本酒があつたのだ。通常は下戸
を装つて飲まないのだが、うなずいて猪口を手にした。
「財田さんみたいな人見つけて結婚すると思つ」

財田さんで近づき、みたいな人で遠ざかつた。上手い
語り方だと感心した。まだ何一つ知つていない女性だが、

なぜか一緒に暮らせそうな気がした。

「いいよ、ずっとついて来てよ」

「ついて行くのは嫌やだな、並んで歩きたいもの」

「これは、無礼を」

ここで二人揃って笑いだした。

まだ余所の宴会の声が聞こえてくる午後七時だった。

柏木手配の片付ヘルプが来る前に汚れた敷布団を布団袋に詰めて粗大ごみとして出す形にしておく必要があったので、朝のうちに小さく畳みなおそうとした。見たくもない痕跡を再度目にしたのだが、昨日は生じなかつた違和感に襲われた。血は性交の際のそれではなくメンスなのではないかという嬉しい疑念はしだいに自分の中で大きくなつていく。いずれにせよ廃棄は結論なので袋に包んで駐車場に置いた自車のトランクに収納した。そのまま車でコンビニに向かい自分用の朝の弁当と三人分の茶菓を買つて戻ると八時半、食べている最中にチャイムが鳴つた。

ヘルパーは背が高い男女二人だった。

「お初にお目にかかります、柏木亜沙美です」

「柏木ゼミの江波です、財田先生のお噂はかねがね」

招じ入れると二人は部屋の中の荷物、家具を早速確認しだした。もしかしたら、あちこちの引越しを手伝わされて慣れているのかもしれない。

旧友の妹は先に点検を終えて改めて挨拶をした。「兄が言うには力仕事は男二人に任せて開梱で不要になつたものの廃棄や家具設置後の細かな掃除を専門にやるようにとの比較的楽ちんな命令でした。あ、その前に突然参りまして失礼しました」

「いやいや、失礼と言えばこちら。彼にはいつも無理なお願いばかり。お世話になつていて恐縮しています」

男勝りで才媛と聞いていたが、想像していたキヤラクターとは違つて明るく気さくな感じの女性だった。

「まず二時間で片付きますね」と予測した江波の言う通り十一時前に、踏み込み近くに引つ越しゴミが積み上げられ、部屋の中は注文通りに家具の設置や細部の整理が終わつた。もうおやつ云々の時刻ではないので二人を昼飯に誘うことにした。

「まだファミレスしか知らないのです、お昼、そこで食べませんか」 亜沙美に訊くのが順当かと提案をした。

「わあ、先生の奢りですか、嬉しい」

これは江波に財布の心配をさせないための台詞だろうと思つた。二人きりならきつとこの発言はない。

「実は僕、朝めしもまだなんです、二食分いただきます」
江波が学生らしい反応をみせた。楽しい食事になりそうな予感がした。

食べながら柏木の面白い性格について語り合つていたときに、江波が産婦人科医になりたがらない昨今の風潮に触れ始めた。まずいなと思つていたら、亜沙美ではなく江波から例の事件が持ち出されてしまった。

「財田先生も医療過誤事件の被害者でもんね、実際にミスをしたのは看護師だったんでしょ？ 柏木先生から聞いています。いえ、噂話風ではなくて産婦人科医が抱えている避けがたいリスクという一例としてです」

ミスをした本人からの自白を聞いている。その場に同席していた同僚の医師も聞いてはいる。ところがマスコミに糾弾された彼女は前言を翻し、記者たちに「私たちナースは先生の指導どおりにしか処置できません。私もそうだけです」と声を詰まらせ、涙ながらに語っ

た。以後マスコミの矛先は担当医と病院そのものに向けられた。病院は経営上の損得勘定から早期解決を優先させ看護師を庇護し医師を処分する決断をした。平たく言えばそれだけの話だ。私の性格を読み切つた部長の台詞は今でも覚えている。「シングルマザーの彼女には五歳の女の子と老いた病身の母親がいてね、言わば緊急避難的に嘘をついたんだ、これが真実を犠牲にして財田先生に泣いてもらった理由だ。病院の苦衷も察してほしい。ほとぼりが冷めたころきつと名誉回復に努める。だからこのとおりに薄くなつた顛頂部(うちょうぶ)を見せて話は終わった。再雇用など嘘だと誰にでも分かる。

「財田先生は稀有な存在だ。誰が看護師の生活を護るために医師としてのキャリアを穢すものか。最終的な結果の善悪、損得を超えて心が揺さぶられる。兄は飲むといつもそう言うのよ、ときどき涙ぐんだりして。だから今回お会いするのを楽しみにしていました」

「僕も同じです。それにしてもそのナース、今でも病院に居るんですか、したたかだなあ、女は。あ、すみません、亜沙美さん」

笑つて同意した後で彼女が言った内容は初耳だった。

問題のナース川原聡子は事件後まもなく母親が亡くなり、院内の冷たい視線に堪えられないこともあってか、辞表を提出して去ったというのだ。兄から聞いたという自分の引責辞職の意義の大半が失われたことになる。病院がある程度対面を護れたという以外、何があると言うのだろうか。私は少し陰鬱な気分になった。

亜沙美はさすがに私の変化を見逃さなかった。「ねえ、わたしビール買うから先生のお部屋で少し飲みません？ 二人で引越祝い。どうかしら」

これは賛成せざるを得なかった。

会話の場を部屋に移しても話は医療から離れない。趣味の話とか無いのだろうか。そんなことを思った。うつかりするとまた触れたくないところへ連れて行かれる恐れもある。

「今度田崎教授の許に配属されるんですよ」

亜沙美がビールを紙コップに注ぎながら言った。やはり危惧したとおりになった。

「柏木のお陰で救われた。どこへ赴くかはまだ決まっていならしい。だからこの先ずつとここに住むかどうかも確定はしていな」

「先生のご実家はどこなんですか？」

「ごく近い。五キロと離れていな」

「先生、じゃあ、もつたいないですよ、借家暮らしなんて。きつと大きい家でしように」そう言うってから江波は自分で口を塞いだ。

亜沙美は江波の仕草に頬を緩めてから「きつと訳があるんですよ」と矛先を変えた。

「何かというと縁談を押し付けてくるからだよ、ほかに理由なんてない。参るんだな、これが」

「でも、もうその心配は無いじゃないですか」

柏木は真弓失踪の件を亜沙美に伝えていならしい。確かに離婚届が戸籍役場に出されていな以上、私と真弓はまだ法律上夫婦なのだが。

「えっ、先生奥さんいるんですか」と江波が驚く。

「まあ、その辺りはいいから。勘弁して」と笑って誤魔化してみた。自分自身にさえ現状を説明できないでいるのだから当然だった。

亜沙美が小さく首を傾げた。

長野県の須坂の宿で一泊した翌日に眼科医院に行く

と経過はそれほど悪くないとの診断を得た。何より早期に治療を受けたことが好結果につながったとの言葉が私を喜ばせ満足させた。これに比べれば賃金放棄という代償など取るに足らない。具体的には翌日もう一度診て後はしかるべき薬を渡すので帰宅しても構わない。できれば帰宅後地元的眼科に一度は行って確認をとりなさいとの助言を得た。その日の夜、つまり須坂最後の夜、真弓は何も言わず私の胸に顔を埋めて泣いた。まるで私の浴衣で涙を拭き取っているかのように顔が動く。

「ずっと一緒にいてあげようか？」

思い付きでも戯れ言でもない、それは心の奥底の想いが言わせたと自分で確信をした。

真弓は顔を離し、少し驚いたように見上げた後でゆっくりとうなずいた。まだ私が何者であるかも知らないだろうに。彼女もまた、心のままにそうしたのでろう。

床についてから、「いろいろ男として準備があるから半年後でいいか、結婚」と髪を撫ぜながら告げた。母親の同意、就職、真弓の両親の賛意、新居などクリアすべきことに配慮したつもりだったが、真弓は急に虚ろな表情で私を見詰めたあと、ゆっくと背中を見せて言った。

「すぐじゃダメなの？ みんな同じね」

それは言葉少なな真弓らしく、万語に勝るメッセージだった。自分の恋愛遍歴といまも自分を支配している心の傷の深さを告げる一言だったろう。「みんな」を使えば今度も壊れると知つての覚悟のつぶやきと受け取れるからだ。私は真弓のこの一言で決めた。

「君がいいならすぐでいいよ」

婚姻届は二人で、母に紹介する前に済ませた。証人には旧友の柏木と真弓の実兄秋野雅人がなっている。

「なんだ、もう終わって呑み会かよ」

チャイムが鳴ったのでドアを開けて中に入れると柏木が大袈裟に驚いてみせた。相変わらず明るい医者だ。

「亜沙美、控えるよ、お前は底なしの酒豪なんだから」
「兄貴、ばらすなよ、淑女装ってるのに」

いつもこんな兄妹なのかと顔がほころんだ。一人っ子の自分としては羨ましくもある。あ、もしかしたら真弓は妹感覚で気になっていたのかも。ふと、そんなことを思った。

「迷わずに来られたのか？」

「カーナビ持っていないのか、財田は」

「あれは土地勘のない奴のオモチャだろ」

「さすがご老体、でもパソコンは達者だな」

「先生、ご老体は無いと思います、財田先生、見た目は三十代前半ですよ」

思わぬ援軍は江波だった。若めの評価は嬉しい。

「先生、まだ少しビールありますよ」

「ばか、俺は車だよ。どうする？俺はすぐ帰らなくちゃいけないんだが、一緒に乗っていけ。もう片付ヘルプもビールも終わってる」

「江波君そうしよう、手伝った時間よりお邪魔してる時間の方が長くなっちゃった」と、亜沙美が手際よく片付け始めた。才媛などという言葉は空虚だが、彼女が隙のない利発な女性だとは十分に解かった。ただ突っ込みどころがない女は苦手だ。和服の身八つ口のようにどこかに空きがなければ触れようがないではないか。容姿も含め何もかも申し分のない女性に見えるが自分には過ぎていて無理だと思った。

「財田、悪いな、話はこの次に」と柏木がウインクをした。二人の前で話せる内容でもないということだろう。

「明後日教授の用事で近くの蔵市まで来る。その帰りに寄るから。車で来ないので飲めるし」

「いつも、すまない、感謝の一言に尽きる」

「よせよ、気持ち悪い」笑顔も極上に明るかった。

柏木は約束通り当日の夕方に来た。

「そうか、彼女がお前の素性や職業を知ったのはおふくろさんの口からなのか、罪なことをするなあお前も。さぞかしビックリしたろう」

柏木は三百五十二の缶ビールを呷ってから、なぜか寂しそうな顔で言った。よほど同情したらしい。

「先の見えない失業状態で職業医師とは言えなかったし、血筋、家柄、経歴なんてその人間のお飾りみたいなものだろう、大事なのは人間性だし、今だろう」

「お前らしい見方だな、否定はしないが相手の考え方も感じ方で結婚に向かう想いが挫けてしまう、だいいちお前だってさつき言ったぞ、亜沙美が完璧すぎて自分には合わないって。お前の論はすでに破綻してる」

もし柏木の言う通りなら、あの汚された布団は引き返すことができる黄金の架け橋を自らの手で断ちきる小

道具ということになる。併せてこちらに離婚についての正当な理由付けを与えてくれたことにもなる。そうなのか。当たっているなら自分は真弓に護られてしまったということか。

今度は私がビールを呷った。

「で？ 離婚届はどうなってるんだ。まだ記入して送ってない？ それともこっちから送ったけど記入されて戻ってこない？」

「そのどちらでもない」またビールを手にした。

「そうか、実質的にも外觀上もそうは見えないけれども二人はまだ夫婦のままだ。しかもお前だけじゃなくて彼女も離婚届の用紙すら手にしていないかもということだ。俺なんかには到底解からん心の世界だな」

「不惑にまでなつてと笑ってくれていい。ただ自分から届を用意する気はない」

「黙って消えたわけじゃないだろ？ 何かメッセージが無かったのか」

直截的な問いなので汚された敷布団の件を話した。最初の解釈と結婚がメンスだと分かってからの解釈も言うことになった。

「彼女が月経だったとしよう、しかし周囲のスペルマはどう説明する、いや、どう解釈する？」

「考えられるのは、実の兄が彼女の考えに手を貸して」「自分で撒いた。つまり彼も結婚は無理だと思い、お前に呆れられ捨てられるという妹の狙いに賛同した」

「ああ、そんなところだ」

「しかしどこまでもいい奴だな、お前。そこが女にはまらない魅力なのかもしれないが、亜沙美も一度会ったきりなのに好みのタイプだと言ってはしゃいでたよ」

「辛辣だな」と頭を搔いたが、こういうのは理屈ではなく。自分はどこまでも自分でありたいのだ。ただ柏木には深謝しようと思った。

「柏木、とにかくいろいろありがとう」言葉だけでなく正座になって頭を下げた。

「そんなにいい女なのか、会ってみたいな」

「そう思ってもらってもいいが、一人ぐらい信じられる女がいて欲しい、その想いが強い」

過去を知る柏木なら分かるはずだと思った。

「ところで財田、三年間山陰地方の私立病院で専門医として勤めてから中央へ戻れと教授の指示だが同意でき

るかど教授が言つてた、同意なら即刻決まる話だそうだ」
そう言つと彼は乾杯でもしたいのだからか、新しい缶
ビールを手渡して寄越すと自分の缶の蓋を勢いよく開
けた。

赤い実の付いた檀が入荷したとの連絡を受けてすぐ
に希美の女店主に来てもらった。花器が素晴らしかった
のでレンタルではなく購入に変えている。素材は注文し
た三種類しか使つていなかった。一時間ほどで生け終り
彼女が帰つた後で、じっくりと完成作を眺めた。
審美眼はないが心で味わう姿勢はある。

時間にして十分ほど経つた頃に不思議な思い付きが
起つた。そんなわけではないとか、こじつけだとか、自分
に突つ込まれながらも最初から真弓が意図していたに
違いないと思うようになった。生けられた素材を背の高
い方から並べると「檀、竜胆、小菊」になるが、これを
暗号のように解読すると、「真弓の倫道(りんどう)を小さ
くても聞く」になるのだ。しかし彼女のプランは成らな
かった。花器が無かつたからだ。ではその花器を心で解
くかどうか。無かつた花器とは「真弓の自信」だ

ろう。そう伝えきる自信が無かつたのだ。ここで思い出
すのは真弓が文学部出たこと。ここに至つて私は確
信を抱いた。大丈夫だ、このまま夫婦でいよう。

生け花が出来た翌々日の午後、こちらの決意に呼応し
たかのように真弓が、兄雅人と一緒に訪ねて来た。夫婦
間の往来に訪ねてというのも変だが、一度は観念的に距
離が出来ていたのでそんな感じだった。

こちらは心底嬉しそうに二人を招じ入れたが、二人は
叱られに来た子供のように強張つていた。踏み込みにた
つた真弓は真つ先に生け花に気づいて目を瞬かせた。

「真弓の人の道、倫道を小さくても聞いてください。君
が残していった檀の枝や切り花に籠めた意味はこれだ
ろ、確かに聞き取つたよ」

これには兄の方も驚いたらしく真弓の顔を窺つた。
「それでもこれを持ってきました、わたしには先生の奥
さんは無理です、ずっとレベルが上の人じゃないですか」
ついていくのではなく並んで歩きたい、須坂での真弓
の言葉が思い出された。

真弓が立つたままハンドバックから何かを取り出そ

うとするのを手で制して「まあ、上がりなさい、立ち話をするのも何だから。お兄さんもうどうぞ」と言った。

三人ともサッシ戸の前辺りに座り、期せずして同時に深呼吸をした。

「前回は先生のお母様のお話で委縮した妹の気持ちに流され、ちようど夜に粗相をしてしまった敷布団のことを知ってとんでもない失礼な細工をしてしまいました。わたしの提案でした、先生への未練をすっぱりと切るための愚策です。本当は今日のようにきちんとご挨拶するべきだったんです、すみませんでした」

諸手を突いて頭を下げた二人。真弓の手は封筒をこちに押し出している。だまつて受け取り、中身が離婚届であることを確認した。

「あのスペルマは雅人さんのだね？」

言わずもがなだが、はつきりさせたかった。

二人が揃って顔を上げた。真弓の眼が潤んでいた。

「はい、真弓が買い物をしてに出掛けた後で」

「じゃあ、動機がはつきりした以上何の問題もない」

「ありがとうございます。僕は真弓以上にばかでした。でも先生の大きさに比して余りに小さい自分に気づい

て委縮したこいつを見ていたら、よほどの別れ方をしないと吹っ切れないと思っただんです、先生のお気持ちも考えずに愚かでした」

「もういいよ、驚きはしたが初めから大きな怒りも真弓への失望もなかった。未完成の生け花、とくに唇籠の檀の意味をずっと考え続けた所以だ。心の奥底で信じていたんだ、とにかく、一人ぐらい信じられる女性が欲しかった。だからこそ真弓を信じたかった」

眼帯がとれて素顔になっている真弓が大粒の涙を流し始めた。

雅人が妹の涙顔を見てハッと思い出したように語りだした。婚姻の証人欲しさに何のわだかまりも無く実家の玄関から大声をあげて中に入って来た妹は、行方不明になったころとは別人のように輝いていた。母親に抱きつき、父親には素直に謝り畳にぶつけんばかりに頭を下げた。そしてその後の屈託のない笑顔。家族間の融和があつという間に成った当日のことを。

「もしかしたら真弓は先生の中に父親なるものを見たのかもしれないね、きょうお会いしてはつきりと解かりました」

「僕が十二歳でつくった娘か、なるほど」

笑顔で軽く流すと真弓が笑みを浮かべた。泣き笑いの真弓が体だけが大きい幼児のように可愛かった。

「真弓、母を含め人がどう思おうとどう言おうと気にすることは無い、大事なのは二人の気持ちだ。僕は君が好きだしこれから先もずっと一緒に生きていきたい。それだけじゃダメなのか」

「先生……」と首を激しく振る真弓。

「その先生はやめてくれ、おじさんでいい。医師免許は確かにあるが、出会いのときの君の観察通りいまは仕事を干されて、ただのおじさんだ。一人の中年男財田育志でしかない。二人がゼロから一緒に再スタートを切るには恰好のチャンスだろうと思う。もつともこう言ってしまうと生活不安から振られる恐れがあるから蛇足するとね、幸い復帰先は決まっている。ただ山陰地方の私立の病院に三年間産婦人科医として勤務することになっている。一緒に来て欲しい。とにかくよく考えて返事をくれないか、この離婚届は出さずに待っているから」

「はい、気持ちを整理してご返事します。わたしも財田さんが好きです、ほんとうの男の優しさを教えてくれま

した。でも立派な妻になれる自信が無いんです」

やはり母の言動に囚われている。そう確信をもった。「あの母とは一緒に住まないから気にするな。それが出来るくらいならあの恵まれた邸を出て借家生活はしてない」と笑ってみせた。

「真弓、父さん母さんを交えて話し合っただけで出直そう。もちろん真弓の気持ちが一番だけだな。とりあえず高ぶったものを落ち着かせないと」

「はい。じゃ財田さん、あの日の真弓に戻って、きつと参りますから」

二人が帰ってから煙草を探し、またバルコニーに出た。秋の風が邪魔をしてなかなか火が点かない。煙の出ない煙草をくわえながら暫くの間遠くの景色を見ていた。

二日後、真弓から封書が届いた。

『先生、真弓は真剣に自分と向き合い結論を出しました。大好きで尊敬している先生に自分可愛さから嘘をつくのは止めます。血の痕は確かに生理のものですが、その最中に、追いかけてきたある男にレイプされた結果でもあります。志賀高原で先生に忠告したこともあると言っていました。私の余りの抵抗に行為の途中で帰って行き

ましたが、彼に再度汚されたことは確かです。兄には全部話しましたから呆れられ、きちんと謝罪に行かずに済む話ではないと激怒されました。結果は兄まで巻き込んで嘘の上塗り、帰宅して自分に唾しました。凶々しく許してくださいとは言いません。離婚の届出をお願いしませ。それとともに私のことはお忘れください。夢を見させていただき有難うございました。すみませんでした、やっぱ檀はまだ雌雄異株から逃れられないようです。以後私は定職に就くべく努め、決まれば実家から通います。先生のおっしゃった再スタートを独り地に足を着けて頑張ります。お元気で活躍くださいませ』

手紙を折り曲げ封筒に戻して玄関先の檀の生け花に目をやった。

ふと家主の言葉が蘇った、兄の車で一緒に帰ろうとしたのに大きな荷物を二つ持ち家主の庭の沓脱石に置いたのはなぜなのか。兄妹には見えなかった。結婚そのものを無いことに…。しかし首を振った。もういい、何が嘘で、誰が嘘つきなのか。自分の心でさえ嘘ではないと言いつける自信がないではないか。

信じたいと信じられるは、決して交わることのない二

本のレールなのかもしれない。そんなことを思った。

「そうか、強い意志で自分と向き合うか、これからもずっと…それも倫道だな」

私は檀だけを生け花から引き抜き屑籠に入れた。

(完)